

[巻頭言]

歴史の節目に立ち、 研究所の使命を考える

敬愛大学総合地域研究所所長

藪内 正樹

平成28年は、千葉開府から890年、敬愛大学にとって創立50周年という節目の年でした。890年前の平安末期は、武士が勢力を伸ばし、やがて天皇と将軍、権威と権力が分離する日本独特の体制が形成される転換の時代でした。

敬愛大学は、幕末の時代を切り拓いた英傑、西郷隆盛が遺した言葉「敬天愛人」を建学の精神としています。幕末の千葉では、下総佐倉藩主の堀田正睦が英蘭学者の手塚律蔵を招き、日本で初めて「英語」の体系的研究を始めさせました。その後、堀田と手塚の人脈からは西周、神田孝平、津田仙、内田正雄、三宅秀といった人物が輩出されました。また、蘭学医の佐藤泰然を招き、医学塾と診療所を兼ねた佐倉順天堂を開かせ、「西の長崎、東の佐倉」と称されるほどの学問の拠点を築きました。堀田正睦自身は、老中首座に任ぜられ、開国派の立場に立って日米修好通商条約の交渉に奔走しました。

歴史を切り拓き、今日の日本の礎を築いてきた先人たちの偉業を想う時、自分は何をなしうるのかと自問せずにはられません。

世界は、大きな転換期を迎えていることは誰の目にも明らかだろうと思います。それは戦後体制の転換にとどまらず、70億人を突破して100億人へ向かう地球人口、冷戦終結後の資本主義の発展の中に歪みが増大していると多くの人々が感じていることなど、自然と文明、政治と経済が歩んできたこれまでの道が、大きな壁にぶつかっているということだろうと思います。

また日本は、課題先進国として、あるいはアジア太平洋の一員として、かつてない重要な役割を果たしうる、あるいは果たすことを求められているのかもしれません。創立50周年を迎えた敬愛大学は、この3月までに1万4千人近い有為な人材を送り出してきました。引き続き、千葉そして日本、世界の諸地域をつなぐ役割を果たすことのできる人材を育てるため、気を引き締めてまいりたいと思います。